

症例9 特定の人への攻撃

- ・ I氏 78才, 女性
- ・ 特記すべき既往症はなし

主症状

症状〔1〕群 2年前から物忘れが目立っていた。

冷蔵庫に賞味期限の過ぎた食品がいっぱい入っている。

食器を洗わないまま、重ねている。

クズカゴに何でも捨てる。

娘との約束を忘れてしまう。

症状〔2〕群 現在、アパートの管理者に攻撃的言動がある。

「あなたが私のものを盗む」

「家賃を二度払わせた」

「アパートが汚すぎる」

などと、昼夜かまわず文句を言いに行く。

管理者の息子には優しい。

管理者からの要請で娘が泊まってIを見てみると、Iは夜中に独りごとを言っている。幽霊(比較的若い男性)が出現しているらしい。

生活歴

Iには隠された生活史があった。Iは21才の頃、資産家の息子である男性と結婚した。Iは夫の家族と同居したが、姑に嫌われた。彼女は後継ぎの男の子を生むと、1年も経たないうちに嫁いだ家を追い出された。彼女は子供を渡してもらえなかった。Iは実家に戻った。その後は、追い出された家とは何の関係もない状態となった。

23才の時に上京。食堂で働いていた時、夫となる男性と知り合った。27才で結婚、女の子2名を生んだ。娘2人が成長して結婚すると、その後は夫と2人で生活。5年前に夫が亡くなってからは、Iは一人で小さなアパートに移って生活をした。時折、娘が様子を見に来ていた。

【検討】

Iは2人の娘を育てるとき、先の結婚歴と男の子を産んでいることを内緒にしていた。やがて、夫は亡くなった。Iも歳をとった。子供が増えた娘の1人に家を与え、Iは小さなアパートに移り住んだ。5年が過ぎた。

アパートの管理人には、自分の生んだ男の子と同年齢くらいの息子がいた。管理人一家には孫もいて、皆で仲良く楽しそうに生活していた。

Iは管理人にうらやましさと憎しみを、次第に持つようになった。管理人を自分の男の子を奪った、あの姑と同じ人種と思ったようである。

これは、Iが別れた男の子を長い間心配し続けていたこと、また強制されたからとはいえ、追い出された家に子供を置いてきてしまったことを後悔していたことを示す症状である。

そして、その当時から55年が過ぎ、認知症が進行した今、我が子を思い出し、自分の部屋へ呼び寄せるようになったのである。成長した子には会っていないので、息子の姿はおぼろげな姿である。したがって、Iが話しかけている相手は、娘には不気味な幽霊としか思えなかったのであろう。

しかし、「Iは優しくその幽霊に話し掛けていた」との娘からの追加の報告があった。

【考察】

Iの症状は、後悔の念にとらわれる生活史に影響された認知症の症状である。長期間にわたるIの後悔の念が、Iを認知症に時期を早めて陥らせたと考えられる。

Iには、自分が生んだ子供に「かあさん！」と呼んでもらい、優しく対応してもらうことが望ましい。これが最高の治療法となるからである。

しかしIを憎んだ姑と、それで「よし」とした父親(Iの夫だった人)に育てられた子に、Iを母親として迎え入れるだけの考え方を要求するのは難しいことであった。

Iは、今の家族が面会に行くのが便利な、近くの他の病院へ入院した。

【まとめ】

自分の子供を育てなかったことによる長い間の罪の意識と、子供への心配が症状となっている例である。